



Title	音楽が苦しい
Author(s)	野村, 公
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 12: 54-54
Issue Date	1991-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8566
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

音楽が苦しい

野村 公

私は、岩見沢分校という教員養成の場で、音楽教育という職業に30年間たずさわってきた。いま退官にあたって振り返ると、学生にも分校にも様々な思いが残っている。

学生に対する思いの中で、「なぜ小学校の先生は音楽もやらなければならないのか」という哀願にも似た学生の訴えがあったことは、私の心にひっかかっている。私は学生に、「小学校の先生になるのなら、国語、算数、理科、社会、と同じように音楽も教えなければならないのだから、歌うことにも弾くことにも、逃げたりしないでがんばりなさい」と言い続けてきた。

制度上でいうならば、小学校では学級担任制がとられているから、1人の教師が1学級を担当し、その教師はその学級の、全教科に関する学習指導の責任をもつことになっている。

しかし、音楽の中学校教諭の免状をもっていると、専科担任として小学校に配置されることがある。これは専科制といって、教育内容の高度化専門化に対応して、授業の質を高めるためのものとされている。音楽指導が、専科制によって行われている小学校もあるが、ほとんどの小学校では、学級担任がその学級の音楽指導の責任をもたされている。というのが実情である。

学生は、将来小学校教師を志すなら、教師になった場合、かならず、子どもの音楽指導に対する責任をもたされるものと考えるのが賢明であろう。そして、子どもの前に立った時を考え、責任にこたえられる力量を、学生時代に養っておくべきであろう。こんな理屈は承知していても、なおかつ逃げたくなる学生もいるのだから、やはり音楽は苦しいものなのである。

大学での音楽は、ピアノを弾く、歌をうたう、笛をふく、リズム唱をするなど、実技習得の内容が主となっている。学生の中には、幼児期から音楽塾で教育を受け、実技能力の高い者もいるが、ほとんどは、大学に入ってから、始めてピアノに触れた者で、音楽の授業に対しては、苦手意識をもっている者が多い。

——自分は音痴である——。——聴くのは好きだが——。——カラオケならやれるのだが——。——伴奏をひきながら歌うなんて、とうてい考えられない——。というのは、よく聞く学生の声である。学生の中には、やれないとか、音痴だとか、始める前から自分を決定づけている者がいる。聴くのが好きだからといっても、子どもと音楽鑑賞に浸ってばかりもいられまい。カラオケが得意だからといっても、教室で演歌やロックに浮かれるわけにもいくまい。小学校の音楽指導は、ピアノがひければよしというものではないし、声がよければ大丈夫というわけでもない。笛をふいたり歌ったり、リズムあそびや伴奏など、子どもと一緒に音楽活動を行なえる実技全般の能力が必要なのである。それは、高度な演奏技術ではなく、教材をこなせる程度の基礎的レベルである。

音楽の実技を習得するには時間がかかる。スキーの「すべり込む」、マラソンの「走り込む」というスポーツ用語があるが、音楽にも「弾き込む」「歌い込む」がある。これは練習量を意味する言葉である。上達の度合いは練習の量に比例するものであるから、大いに弾き込み歌い込みを重ねてもらいたい。説教じみたことを書いてしまい恐縮であるが、学生諸君にがんばってもらいたい。

(本分校 音楽教育学研究室)